

リ・プロダクツ

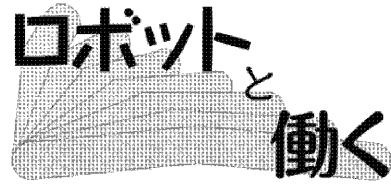
2018年はリ・プロダクツ（大津市、高奥要輔社長）にとって「ロボット元年」となった。シヨッピングセンターなどの清掃業務を請け負う同社は、清掃スタッフの確保が難しくなったことから掃除ロボットを導入。同時に、掃除ロボットのニーズ拡大を見据えて法人向けレンタルサービス事業も始めた。人手不足の拡大を背景に事業は着実に成長。今や掃除ロボットは、同社にとってなくてはならない存在だ。

リ・プロダクツではトは高かったが、今が関西や北陸、首都圏で使えないと性能が良くな約700人の清掃スタッフからでは使いこなツフが、シヨッピングセンターやオフィスビテナ「と、導入を決セの清掃を行っていめたもう一つの理由を振返る。

従来使用していた、人が運転する床洗浄機をソフトバンクの現場の見極めなどをボテイクス（東京都港含めて、実際に使い区）の自動床洗浄ロボット「RS26」に置き換えた。最初に清掃エリアを手動運転して地図を作成、清掃ルートを記憶させ、次回以降はスタートボタンを押すだけで清掃ルートを自律走行する。

今では10台が現場で活躍している。導入当初は、安全性やセキュリティの観点から顧客の理解を得るのも一苦労だったという。

高奥社長は「ロボッ



法人清掃 レンタル参入

スタッフ派遣と二刀流

業に活用している。法人向けレンタルサービス事業は現在、工場の大規模施設向けに2機種、オフィスな使用の方など、自社の



シヨッピングセンターなどの清掃現場で活躍する自動床洗浄ロボット「RS26」社内清掃でレンタルサービス向け掃除ロボットの検証も兼ねる

や飲食店などの中小規模向けに4機種の床用ロボットを選定や最適化の認知度も高まっている。背景には、掃除ロボットの需要増だけではない。高奥社長の「いずれ人が清掃する需要が減っていくか」という危惧感もある。レンタルサービスの導入は人手の清掃は階段だけとなり、15分程度で済むようになった。自社でも掃除ロボットを導入した。



同僚のロボットが清掃しやすいように掃除ロボットの検証に、モップの製造やレンタルマットの洗濯などを担うサービスセンター（大津市）にも導入している。

「快適空間の提供」へとフィールドを広げ、レンタル商品のラインアップを増やしていく。

今後は清掃を軸にした「快適空間の提供」へとフィールドを広げ、レンタル商品のラインアップを増やしていく。